

六条齋院祿子内親王歌合注釈(八)

〔天喜四年〕八月

加藤 幹子

本文は『新編国歌大観』(85六天五)を用い、『陽明叢書国書篇 第四輯 平安歌合集上』並びに『平安朝歌合大成』(二六八)を参照して表記を改めた。

同齋院歌合 八月

題 十五番 歌人十八

鈴虫 松虫 きりぎりす

機織女 轡虫 雁

千鳥 小鷹狩 鳴

鹿 月 駒迎へ

霧 秋田 衣うつ

鈴虫

左勝

出羽

1 ふりたてて鳴く鈴虫の声ことにまどろまぬかな秋の夜な夜な

右

武蔵

2 しをれゆく花を見つつも鈴虫の声ふりたてて惜しむなるかな

松虫

左持

宣旨

3 松虫の声鳴き尽くす野辺に来てたのためぬ人も旅寝しぬべし

右

左衛門

4 花見には人も定めず来るものを誰を松虫野辺に鳴くらん

きりぎりす

左

美作

5 きりぎりす秋の夜な夜な鳴く声をまたまどろまぬ友と聞かなか

右勝

丹後

6 秋深くなりゆくままにきりぎりす衣急がす声ぞいとなき

機織女

左

小馬

7 秋風にしをれゆくめる草むらに機織る虫は乱れてぞ鳴く

8 いろいろの花の錦にたち添ひて機織る虫の声ぞ聞こゆる
右勝 式部

轡虫

左

中務

9 待つ人のある夜なりせば轡虫駒引き留めて来ぬと聞かまし

右

讃岐

10 草隠れ駒並めてゆく旅人の聞き渡さるる轡虫かな

雁

左勝

出羽

11 歸りにし春のつらさも忘られて秋のあはれを添ふる初雁

右

丹後

12 初雁の旅の空なる声すなり幾雲路をか分けて来つらん

千鳥

左持

宣旨

13 寢覚めして誰か待ち聞く小夜千鳥訪ふ秋の深きあはれを

右

讃岐

14 千鳥こそ鳴き渡るなれ思ふどちよろづ代祈る夜半のまどゐに

小鷹狩

左脇

美作

15 御狩する人のみ見ゆる秋の野は立ちぬる鳥やしづ心なき

右

武蔵

16 秋の野に狩に出でてはいろいろの花を見るこそとりどころなれ

鳴

左持

小馬

17 誰かまた暁ごとに夢さめて羽かく鳴の声を聞くらん

右

左衛門

18 我ならで誰か聞くらん暁の羽かく鳴の数をつくして

鹿

左持

中務

19 妻恋ふる鹿の涙や露ならん秋の下葉も色深く見ゆ

右

式部

20 妻恋ふる鹿の涙や秋の野のしがらむ萩の露となるらん

月

左

出羽

21 およびなき心もそらにすむものは隈なく照らす秋の月影

- 22 よそながらながめ明かさやかなる月につけてぞ秋も待たれし
右勝 丹後
 駒迎へ
- 23 これやさは関の清水にかけ見ゆと聞き渡りつる駒の足並み
左持 小馬
- 24 逢坂の関の清水にひく駒は今宵やかけをうつしそむらん
右 左衛門
- 25 絶え間なく八重立つ霧にむせびつつ心晴れせぬ秋の山里
左 宣旨
- 26 霧晴れぬそ空をながめて秋の夜のまだ明けぬ間と思ひけるかな
右勝 武蔵
- 27 山田守る賤の庵には秋風になびく音をやかると聞くらん
左 中務
- 28 秋深き山田守る男の心にはめづらしげなき寝ぬ夜なるらん
右勝 讃岐

衣うつ

左
脇

美作

29 唐衣打ち明かすなり秋風のつらめづらしく吹きし宵より

右

式部

30 聞く人も起き明かすかな夜もすがら打つ狭衣に目のみ醒めつつ

同齋院歌合 八月

題 十五番 歌人十人

鈴虫 松虫 きりぎりす

機織女 轡虫 雁

千鳥 小鷹狩 鳴

鹿 月 駒迎へ

霧 秋田 衣つつ

鈴虫

左 脇

出羽

1 ふりたてて鳴く鈴虫の声ことにまどるまぬかな秋の夜な夜な

【語釈】

ふりたてて 「ふりたつ」は声を張り上げる、力を絞って声を上げることという。「ふり」と「鈴」が縁語

【現代語訳】

力いっぱい鳴く鈴虫の声が聞こえる度に、（その声を聞いていて）まどろむこともありません、秋の夜な夜なは。

右

武蔵

2 しをれゆく花を見つとも 鈴虫の声ふりたてて惜しむなるかな

【語釈】

しをれゆく花を 「しをれゆく花」が具体的にどのような花をいうのかは解らないが、後世では「尾花」と結びつけられた例が散見される。

鈴虫の 「鈴」と「ふり」が縁語

【現代語訳】

しおれていく花を見ながら、鈴虫が声を振り絞って鳴いて（花を）惜んでいるようです。

萩谷朴氏が平安朝歌合の特殊批評の一つとして指摘している「一番左歌は負けず」に則った判であるうか。但し、それも絶対の規則ではない。左出羽の歌は伝統的な詠み方で、言葉続きにも拙いところはない。それに対し、右の武蔵詠は鈴虫を擬人化した点が斬新ではあるが、二句から三句以降への繋がり難がある。この二首に関しては、「一番左歌は負けず」という特殊批評に拠らずとも「左^勝」との判は妥当なものと言えよう。

松虫

左持

宣旨

3 まつ虫の声鳴き尽くす野辺に来てたのめぬ人も旅寝しぬべし

【語釈】

まつ虫の 「まつ」は「待つ」と「松(虫)」の掛詞。参考歌「秋の野に人まつ虫の声すなり我がとゆきていざどぶらはむ」(『古今和歌集』巻四 秋歌上 よみ人しらず)

【現代語訳】

訪れを待つて松虫が声のあらん限りに鳴く野辺に来て、(来ると)約束してくれたわけでもない人も(松虫の声に負けて)きつと旅寝をすることでしょう。

右

左衛門

4 花見には人も定めず来るものを 誰をまつ虫野辺に鳴くらん

【語釈】

誰をまつ虫 二十巻本「たれをまむし」とある。「まつ」は「待つ」と「松(虫)」の掛詞。萩谷朴氏は当該歌を「秋の野に來宿る人も思ほえず誰を松虫こころ鳴くらむ」(『古今和歌六帖』巻六)と「花見には群れてゆけども青柳の糸のもとには來る人もなし」(『拾遺和歌集』巻一 春歌 よみ人しらず)とを併せたものと指

摘している（『平安朝歌合大成』一六八）。

【現代語訳】

花見には誰も彼もが来るものですが、（来るはずもない）誰を待つて松虫は野辺に鳴いているのでしょうか。

左宣言の歌は言葉続きは良いものの、上の句から下の句にかけての繋がりが少々理屈っぽく、平板な歌である。一方、右の左衛門詠は上の句（春・視覚）と下の句（秋・聴覚）を対比的に詠んでいるが、八月の歌合の歌でありながら春の「花見」を秋の「虫の声を聞く」と結びつけた点はいささか強引である。優劣をつけかねて「持」と判じられたか。

きりぎりす

左

美作

5 きりぎりす秋の夜な夜な鳴く声をまたまどろまぬ友と聞くかな

【語釈】

きりぎりす 「きりぎりす」は現在の「こおるまのこ」。

【現代語訳】

こおろぎが秋の夜な夜なに鳴く声を、まだ眠らない友がいるのだと思つて聞きますよ。

右

丹後

6 秋深くなりゆくままにきりぎりす 衣急がす声ぞ いとなき

【語釈】

秋深くなりゆくままに 『平安朝歌合大成』(一六八)では「秋深くなりゆく野辺に鳴く虫のいとどわびたる声きこゆなり」(『高明集』)と「秋深くなりゆくままに風の音の木末に高く吹きもゆくかな」(『長曆』二年九月十三日権大納言師房歌合「為善」を本歌としたものである)としている。(但し、『高明集』の歌は、「歌7」(小馬詠)の本歌として挙げられている。歌の表現から見て「歌6」の誤りであろう。)初・二句が共通する歌は他に「秋ふかくなり行くままに時雨のみふるさと人はながめをぞする」(『定頼集』)がある。

衣急がす 「衣急がす」とは、衣更への準備を急がされていると感じることをいっているのである。こおろぎの鳴き声は「山館雨時鳴自暗 野亭風処織猶寒」(『和漢朗詠集』卷上 秋 虫 橘直幹)のように機織りの音に喩えられる。平安時代では通常、十月一日に冬の装いに変えられた。参考歌「からころも夜風涼しくなるなへにきりぎりすさへ鳴きみだれつつ」(『惠慶集』 『夫木和歌抄』秋五)

いとなき 「いとなし(暇なし)」は忙しない、絶え間がないの意。「衣」と「いと(糸)」が縁語。

【現代語訳】

秋が深くなっていくに従って、こおろぎが衣更えの準備を急がせる声が頻りに聞こえます。

右丹後の歌は初・二句が本歌を踏まえた表現であり、また「衣」と「いと」の縁語を用いた技巧的なものである。左の美作詠もまとまった歌ではあるが、右歌に及ばずと判じられ「右^勝」となったのであろう。

機織女

左

小馬

7 秋風にしをれゆくめる草むらに 機織る虫は 乱れてぞ鳴く

【語釈】

機織女 「機織女」は現在のきりぎりすのことをいう。鳴き声が機織りの音に似ていることに拠った古名で「機織」や「機織り虫」とも言った。

しをれゆくめる 下の句の「乱れ」に対応する表現であろう。「しをる」と「乱る」を結びつけたものとしては早い時期のもので、後の歌には「しをれあしのみだれふしたる難波江に冬のあはれは見えけるものを」（「拾玉集」）などがある。

機織る 「機織る」と「乱れ」は縁語。

乱れてぞ鳴く 「乱れてぞ鳴く」の用例に「かりにてもわかるとおもへばかみながは瀬々の千鳥の乱れて

ぞ鳴く」(『古今和歌六帖』巻二)がある。

【現代語訳】

秋風にしおれ乱れていくような草むらに、機を織る虫々は鳴き乱れています。

右脇

式部

8 いろいろの 花の錦に たち添ひて機織る虫の 声ぞ聞こゆる

【語釈】

花の錦に 「花の錦」は花の美しいことを錦に見立てる表現。春歌の用例が多いが、秋歌での例も少ないながら存する。但し、同時代以前に秋の「花の錦」を詠んだ歌は管見に入った限りでは「秋の野は花の錦をもろともに立ちとまりつつ見てをゆかなむ」(『元輔集』)のみである。

たち添ひて 「立ち添ひて」と「裁ち」の掛詞。「錦」「裁ち」「機織る」は縁語。

【現代語訳】

色とりどりの花の錦に寄り添って、機織る虫の鳴く声が聞こえます。

左小馬の歌は、「しをる」と「乱る」を結びつけた点は新奇な表現であるが、本歌合以前の禊子内親王歌合に

おいて、先例のないあるいは少ない表現を用いた歌が積極的に評価されることはなかった。また、二句「しをれゆくめる」の落ち着きも悪い。一方、右の式部詠も、秋歌に「花の錦」を用いている点は先例の少ない歌語の取り込みであるが、「錦」「裁ち」「機織る」の縁語を用いて、纏まった一首に仕上げている。その結果、「右勝」となった。

轡虫

左

中務

9 待つ人のある夜なりせば轡虫 駒引き留めて来ぬと聞かまし

【語釈】

轡虫 「轡虫」は鳴き声が轡の鳴る音に似ていることからついた名。なお、「轡虫」が歌題に取られた例は、管見に入った限りでは本歌合が唯一の例である。

待つ人のある夜なりせば 「待つ人」は私が待っている人。恋人を指すこともある。「夜なりせば」と結句の「聞かまし」とで反実仮想を表す。

駒 「轡」「引く」と縁語関係。

【現代語訳】

待つ人がいる夜であったなら、轡虫の声も、駒を引き留めて（待ち人が）来てくれたのだと思って聞くのでしょ

うにね。

右

讃岐

10 草隠れ 駒並めてゆく旅人の 聞き渡さるる轡虫かな

【語釈】

草隠れ 同時代以前の例に「草がくれ秋すぎぬべき女郎花匂ひゆ糸にやまづ見えぬらむ」（昌泰元年秋亭子院女郎花合「一番左」）、「草隠れかれにし水はゆるくともむすびし袖は今もかはかず」（拾遺和歌集 卷十二 恋二 清原元輔）、「沼水の波には立てで底深み草隠れつつ逢ふよしもがな」（古今和歌六帖 卷三 よみ人しらず）などがあるが、恋を詠んだものが多い。「草隠れ」が「駒」と「轡虫」のいずれにかかると判じ難いが、轡虫が草陰に隠れるというのではあまりにも当たり前に過ぎること、後世の例ではあるが「春ぞみしみづのみまきにあれし駒ありもやすらむ草がくれつつ」（壬三集）のように「駒」と結びついた歌が数例あること、また「草隠れなく小牡鹿の見えねどもいもがあたりをゆけばかなしも」（古今和歌六帖 卷五 人麻呂）と鹿が「草隠れ」る例があることなどから、二句の「駒」にかかるものとして解した。

駒 「轡」と縁語関係。

聞き渡さるる轡虫かな 馬の轡の首を轡虫の鳴き声がどこまで行っても耳に入ってくることに取りなした

か。

【現代語訳】

草陰に隠れて馬を連ねていく旅人には、どこまで行っても耳に入ってくる轡虫の鳴き声ですね。

この番いには判が付けられていない。「轡虫」という歌題の特異性のためでもあるが、中務、讃岐ともにいささか戯笑を誘う詠みぶりであり、両者とも評価するに値せず判なしとされたか。

雁

左

出羽

11 帰りにし 春のつらさも忘れられ 秋のあはれを添ふる初雁

【語釈】

帰りにし 『平安朝歌合大成』(二六八)では「かへりにし雁ぞ鳴くなるむべ人はうき世の中をそむきかぬらむ」(『拾遺和歌集』巻十七 雑秋 大中臣能宣)を本歌と指摘する。

春のつらさも 『春のつらさ』の用例に「よそにても花見ること音をぞ泣く我が身にうとき春のつらさに」(『後撰和歌集』巻三 春下 よみ人しらず)がある。四句の「秋のあはれ」と対になる表現。

秋のあはれを 「秋のあはれ」の用例に「おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくがれぬとも」(『紫式部集』、『千載和歌集』巻四 秋歌上 紫式部)や「いかばかり君嘆くらん数ならぬ身だに知られし秋のあはれを」(『後拾遺和歌集』巻十 哀傷 前中宮出雲)などがある。「秋」に「飽き」を響かせるか。

【現代語訳】

（私を捨てて）帰ってしまった春のつらさも忘れられないのに、（今また）秋のかなしみを付け加える初雁ですね。

右

丹後

12 初雁の旅のそらなる声すなり幾雲路をか分けて来つらん

【語釈】

丹後 二十巻本「たは^た」とある。襖子内親王歌合において作者名が「たは」とある場合には全て「たこ」と注記されているため、萩谷氏は「丹波は誤りであって、丹後に統一して、一人の女性を想定するのが正しいと思われる。」と指摘している（『平安朝歌合大成』一四四）。

初雁の旅のそらなる声 「そら」は天空の「空」と心が空ろである意の「そら」との掛詞。『平安朝歌合大成』（二六八）では「初雁の旅の空なる声きけばわが身をおきてあはれとぞ思ふ」（『中務集』）を本歌として指摘する。

【現代語訳】

初雁が旅をしてきて（その疲れから）力のない声で鳴いているようです、どれほどの雲路を分けてやって来たのでしょうか。

右丹後の歌は、上の句・下の句が並列的な詠みぶりである。一方、左の出羽詠は、「春のつらさ」と「秋のあはれ」を対句的に用いており、技法の面でより秀でてゐる。その点が「左聯」という結果に繋がったか。

千鳥

左_持

宣旨

13 寢覚めして誰か待ち聞く 小夜千鳥訪ふ 秋の深きあはれを

【語釈】

寢覚めして誰か待ち聞く 『平安朝歌合大成』(一六八)では「寢覚めして誰か聞くらむこのころの木ノ葉にかかる夜半の時雨を」(『馬内侍集』)が本歌であること指摘している。「寢覚め」と「千鳥」を取り合わせた例に「友千鳥もる声に鳴くあかつきはひとり寝さめの床もたのもし」(『源氏物語』「須磨」光源氏)がある。

小夜千鳥訪ふ 「小夜千鳥」は夜に鳴く千鳥をいう。同時代以前の例に「さ夜ちどりはねうつなみのおとすなりよはのはるかせこほりとくらし」(『賀茂保憲女集』)がある。「訪ふ」は小夜千鳥が鳴き渡ることと、秋の訪れとをいう。

深きあはれを 「深きあはれ」の用例に「君ならでたれかみしらん月かげのかたぶくさよのふかきあはれを」(『公任集』)がある。

【現代語訳】

夜中に目を覚まして誰が心待ちに聞くのでしょうか。夜中に鳴きわたる千鳥と共に訪れる秋の深いかなしみを。

右

讃岐

14 千鳥こそ鳴き渡るなれ 思ふどち よろづ代祈る夜半のまどぬに

【語釈】

思ふどち 親しい者同士。

よろづ代祈る 万代の繁栄を祈る。詠まれた場を考えると、恐らくは禊子内親王の万代を祈る、ということであろう。

【現代語訳】

千鳥が鳴きながら飛んでいくようです、親しい者同士が万代の繁栄を祈る夜中の集まりの最中に。

左宣言の歌は、先行歌の表現を踏まえて秋の夜の寂寥を巧みに詠んでいる。対する右の讃岐詠は、優れた詠みぶりでもないが、四句「よろづ代祈る」と禊子内親王に対する祝意を込めている。平安時代の歌合では、祝意の込められた歌は負けにしないという傾向が見られる。そのために「持」となったか。

小鷹狩

左勝

美作

15 御狩する人のみ見ゆる秋の野は 立ちぬる鳥やしづ心なき

【語釈】

小鷹狩 小形の鷹を使って秋に行う狩りのこと。『平安朝歌合大成』（二六八）によれば、「小鷹狩」が歌題に採られるのはこれが最初の例という。

御狩する人のみ見ゆる 公的な行事である鷹狩りに大勢の人が供奉している様子をいう。

立ちぬる 「立ちぬる」は鳥が立ったり座ったりして辺りの様子を警戒して窺っていることをいう。

【現代語訳】

御狩をする人ばかりが見える秋の野では、立ったり座ったりして辺りを窺う鳥は落ち着いた心もないのでしょうか。

右

武蔵

16 秋の野に狩に出でては いろいろの花を見るこそ とりどころなれ

【語釈】

いろいろの花を 都の中では目にすることのない花々のこと。
 とりどころなれ 「とりどころ」は長所、取り得の意。「鳥」を響かせる。

【現代語訳】

秋の野に狩りに出ては（都では見られない）色とりどりの花を見ることこそが、（小鷹狩の）長所ですね。

右の武蔵詠は「とりどころ」に「鳥」を響かせているものの、「花を見る」ことに主眼を置いている点が「小鷹狩」という題からは離れてしまっている。左美作の歌は小鷹狩で獲物にされる鳥に思いを致したものであり、題に即していると言える。その結果「左馬」と判じられたのであろう。

鳴

左持

小馬

17 誰かまた 暁あけことに夢さめて 羽かく鳴なの声を聞くらん

【語釈】

鳴 『平安朝歌合大成』（一六八）によれば、本歌合は平安時代の歌合で「鳴」を歌題として扱った唯一の例である。

暁ごとに 「暁」は夜が明ける前のことで、後朝の別れの時間帯でもある。鳴は「暁の鳴の羽かき百羽かき君が来ぬ夜は我ぞ数かく」(『古今和歌集』巻十五 恋歌五 よみ人しらず)のように、朝方羽搔くものとして歌に詠まれる。

羽かく鳴の 「羽かく」ははばたくこととも、くちばしで羽繕いをすることもいうが、『色葉字類抄』に「攪 手動也」、『新撰字鏡』に「摘 搔也。振也」とあるように総じて羽を動かすことをいう。鳴が羽を動かすのは朝方に限ったことではないだろうが、静かな時間帯ゆえその羽音が特に聞こえるのである。なお、『平安朝歌合大成』(一六八)では「百羽かき羽かくしぎもわがごとくあしたわびしきかずはまさらじ」(『拾遺和歌集』巻十二 恋歌二 紀貫之)を本歌として指摘する。

【現代語訳】

一体誰が暁時にいつも目を覚まして、羽を動かす鳴の鳴き声を聞くのでしょうか、いえ、私以外の誰も聞かないでしょう。

右

左衛門

18 我ならで誰か聞くらん暁の羽かく鳴の数をつくして

【語釈】

羽かく鳴の 『平安朝歌合大成』(一六八)では「百羽かき羽かくしぎもわがごとくあしたわびしきかずは

まさらじ」(『拾遺和歌集』 卷 恋歌二 紀貫之) を本歌として指摘する。

【現代語訳】

私以外に誰が聞くでしょうか、夜明け前に引つ切りなしに羽を動かす鳴(の羽音)を。

左小馬の歌は「羽かく鳴」を詠みながら、その鳴き声を聞くという点で焦点がぶれている。一方、右の左衛門詠は結句「数をつくして」がどこにかかるとか不明瞭であり、意を解しにくい。暁時に「羽かく鳴」の声や羽音を聞くという趣旨が共通していることもあり、どちらも積極的に評価するに値せず「持」と判じられたか。

鹿

左持

中務

19 妻恋ふる鹿の涙や露ならん 萩の下葉も色深く見ゆ

【語釈】

妻恋ふる鹿の涙や 平安朝歌合大成(一六八)では「妻恋ふる鹿の涙や秋萩の下葉もみづる露となるらむ」(『古今和歌六帖』 卷六、「貫之集」) を本歌として挙げる。

萩の下葉も色深く見ゆ 露が置くと、草木の葉を色づかせることとされていた。「色深く見ゆ」は萩の黄葉の色が深いことに、鹿の物思いの深さを響かせた表現。同様の表現に「わが宿のなげきの下葉色深くうつろひに

けりながめふるまに」(『蜻蛉日記』上)がある。萩は下から色づき始めるため、上葉に比べ下葉の方が黄葉の度合は深い。

【現代語訳】

妻を恋しく想って鳴く鹿の涙が露なのでしょうか、(それも加わって)萩の下葉もいつそう深く色づいて見え
ますね。

右

式部

20 妻恋ふる鹿の涙や萩の野の しがらむ萩の露となるらん

【語釈】

妻恋ふる鹿の涙や 『平安朝歌合大成』(一六八)では「妻恋ふる鹿の涙や萩萩の下葉もみづる露となるらん」(『古今和歌六帖』巻六、『貫之集』)を本歌として挙げる。

しがらむ萩の 『しがらむ』は絡みつける。「妻恋ふる鹿のしがらむ萩萩に置ける白露我も消ぬべし」(『貫之集』)

【現代語訳】

妻を恋しく想って鳴く鹿の涙が、萩の野で(鹿が)絡みつく萩に置く露となるのでしょうか。

中務・式部共に紀貫之の同じ歌をもとに詠み換えているが、「萩」との取り合わせや内容が類似したものになっ
てしまっている。そのため、優劣が付けにくく「持」と判じられたか。

月

左

出羽

21 およびなき心も そらに すむものは隈なく照らす秋の月影

【語釈】

およびなき心も 「およびなし」とは分が過ぎて、手が届かないこと。ここでは「心なし」と同様、もの
の情趣を解しない身といった意味で採った。

そらに 「そら」は「心も」そら「に天空の意を掛ける。

すむものは 「すむ」は「心も」澄む」と「月が空に」住む」ある」の掛詞。

【現代語訳】

風流とは縁遠い私の心もつつとりと澄み切った気持ちにしてくれるものは、空にあって隅々まで照らす秋の月
明かりなのですね。

右勝

丹後

22 夜もすがらながめ明かさなやかなる月につけてぞ 秋も待たれし

【語釈】

夜もすがら 参考歌「夜もすがら空すむ月をながむれば秋はあくるも知られざりけり」(『後拾遺和歌集』)

巻四 秋上 藤原頼宗

秋も待たれし 「も」は強調の意であるが、「秋も待たれし」という言葉の裏には暑い夏が早く過ぎて欲しいとの思いが隠されているか。当時の人の秋を待ち遠しく思う気持ちは、藤原敏行の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(『古今和歌集』巻四 秋歌上)などにも表れている。

【現代語訳】

一晩中眺めて夜を明かしましよう、明るく澄んだ月が見られるから秋も待ち遠しく思っていたのですもの。

右の丹後詠は、秋を待ち望んでいた人の気持ちをよく表現している。左出羽の歌は掛詞を巧みに用いたものではあるが、結果として上の句が複雑で解りにくくなっている。そのため「右勝」となったのであろう。

駒迎へ

左持

小馬

23 これやさは 関の清水にかけ見ゆと聞き渡りつる駒の足並み

【語釈】

駒迎へ 「駒迎へ」とは、甲斐・武蔵・信濃・上野の四国にある御牧から貢進された馬を、官人が逢坂の関で出迎えること。駒牽（貢進された馬を天皇が宮中で御覧になり、その後貴族たちに馬が下賜される儀式）に先立つもので、八月の中頃に行われた。『平安朝歌合大成』（一六八）によれば、「駒迎へ」が歌題に採られるのはこれが最初の例という。

これやさは 「これやさは」を初句に据えた用例に「これやさはあきのはつかぜたなばたの雲のころももふきたたるまで」（『出羽弁集』）などがある。『第一句に「これやさは」と感動的な句をおくことは、誰が始めたか知れないが、この時代及びそれ以後に頻りに用いられた新しいスタイルであった』という（『平安朝歌合大成』一六八）。

関の清水にかけ見ゆと 萩谷氏は「逢坂の関の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒」（『拾遺和歌集』

卷三 秋歌 紀貫之、『古今和歌六帖』卷一、『貫之集』）を本歌として指摘する（『平安朝歌合大成』一六八）。

【現代語訳】

これがそれでは、（かの貫之の歌で）逢坂の関の湧き水に映った姿が見えると以前から聞いていた駒の足並み

なのですね。

右

左衛門

24 逢坂の関の清水にひく駒は今宵やかけをつつしそむらん

【語釈】

逢坂の関の清水に 萩谷氏は「逢坂の関の清水にかけ見えて今やひくらむ望月の駒」（『拾遺和歌集』巻三 秋歌 紀貫之、『古今和歌六帖』巻一、『貫之集』）を本歌として指摘する（『平安朝歌合大成』一六八）。

今宵や 前掲の貫之の歌や、後世の例ではあるが「あづまぢをはるかに出づる望月の駒に今宵やあふさかの関」（『金葉和歌集』巻三 秋歌 源仲正）などのように、「駒迎へ」は夜と結びつけて詠まれる。『西宮記』（臨時六 次将事 駒迎事）や『北山抄』（巻九 羽林抄 分取諸牧御馬事）によると、駒牽の前日に馬の到着が近衛府に報告され、当日の早朝、官人が馬を迎えに行ったという。

【現代語訳】

牽かれてきた駒は、逢坂の関の湧き水に今夜その姿を映しはじめるのでしょうか。

この番いは「^持」となっているが、「鹿」題同様、左右共に紀貫之の歌をもとに詠んだものである。そのため似通った歌となり、優劣の判定が難しかったのであろう。

霧

左

宣言

25 絶え間なく八重立つ霧に 　むせびつつ心晴れせぬ 秋の山里

【語釈】

八重立つ霧に 、『狭衣物語』巻三の「まだ知らぬ暁露におき別れ八重たつ霧にまどひぬるかな」（狭衣）について、萩谷氏は当該歌から「修辞表現を学んだものと思われる」と指摘している（『平安朝歌合大成』一六八）。

むせびつつ 、『むせぶ』はここではむせび泣くの意で採った。「霧」との取り合わせは、『和漢朗詠集』入集の漢詩（「咽」霧山鶯啼尚少 穿」砂蘆笋葉纒分」元稹）に見えるが、和歌では同時代以前の用例は管見に入らなかった。

秋の山里 　秋は何かと物思いする季節であるが、寂寥感の強い「山里」にあつてはなおさらのことである。参考歌「なにしかば人も来てみんいとどしく物思ひまさる秋の山里」（『後拾遺和歌集』巻四 秋歌上 和泉式部）

【現代語訳】

絶え間なく幾重にも立つ霧（に閉ざされた寂しさ）にむせび泣いて、心が晴れることのない秋の山里ですよ。

右勝

武蔵

26 霧晴れぬ空をながめて秋の夜のまだ明けぬ間と思ひけるかな

【語釈】

霧晴れぬ空をながめて 「月」を詠んだものであるが、「夜もすがら空すむ月をながむれば秋は明くるも知られざりけり」（『後拾遺和歌集』巻四 秋歌上 堀川右大臣）と同趣。

【現代語訳】

霧の晴れない空を眺めていると、秋の夜がまだ明けない時間帯だと思ってしまうことです。

左宣旨の歌は「霧」に「むせぶ」という結びつけが独特であるが、それ故歌意が取りにくい。一方、右の武蔵詠は決して巧みな歌ではないが、直叙的な詠みぶりで意を取りやすい。理解のしやすさが影響し、「右勝」との判になったか。あるいは、宣旨詠の「むせぶ」という表現が陰鬱と取られたためとも考えられる。平安時代の歌合では、不吉な歌、陰気な歌は好まれなかったという（『平安朝歌合大成』第四章第一節参照）。

秋田

左

中務

27 山田守る賤の庵には秋風になびく音をや刈ると聞くらん

【語釈】

秋田 秋の、稲の実った田のこと。

秋風になびく音をや 草木が風になびく音として解した。

刈ると聞くらん 田を守るために音に対して敏感になっており、風に吹かれた草木が立てる音が稲を盗み刈り取られる音に聞こえてしまうのである。

【現代語訳】

山近くの田の番をする身分の低いもの小屋では、秋風になびく草木の音を稲を刈る音と錯覚するのでしょうか。

右 讃

讃岐

28 秋深き 山田守る男の心には めづらしげなき寝ぬ夜なるらん

【語釈】

山田守る 「山田」という語は、『古今和歌集』の「朝露のおくての山田かりそめにつき世の中を思ひぬるかな」(巻十七 哀傷歌 紀貫之)などのようにわびしさを感しさせる表現として用いられることが多い。但し、禊子内親王家では、「昨日までかへる山田とみしほどに苗代水は影澄みにけり」「小山田の賤の男どもはいつしかとまづ苗代の急ぎをぞする」(「永承五年二月三日庚申 六条斎院禊子内親王歌合」題 苗代)や本歌合 27 中務歌、当該歌を見る限り、わびしさとはあまり関係のない語として用いられているようである。

心には 内心では。傍目から見ると寝ずの番はつらいことだと思われるが、稲を守ろうという男にとってはそうではない、という意。

めづらしげなき 「めづらしげなし」は珍しくもない、いつも、の意。貴族社会に生きる人にとって寝ずに過ごす夜というのは庚申の夜くらいしかなく、「めづらし」いものであったのだろう。自分たちの生活との対比で「寝ぬ夜」を「めづらしげなき」と表現したのである。

【現代語訳】

秋の深まった山近くの田の番をする男の気持ちとしては、珍しくもない寝ることのない(＝寝ずの番をする)夜なのでしょう。

左の中務詠は、草木の音を稲を盗み刈り取る音に聞きなしている点で「田」に繋がるが、「秋風」と詠んでおり「秋田」題から幾分離れている。一方、右讃岐の歌は「秋深き山田」と直接「田」と結びつく形で詠んでいる。讃岐詠の方が題に則した歌であるとして「右詠」と判じられたか。

衣つ

左詠

美作

29 唐衣打ち明かすなり秋風のうらめじしく吹きし宵より

【語釈】

衣うつ 衣のつやを出したり柔らかくしたりするために砧で叩くことをいう。「搗衣」として詩題にもなっており、特に白樂天の「八月九月正長夜 千声万声無了時」はよく知られており、『源氏物語』にも引用されている。

うらめづらしく 「うらめづらし」はなんとなく珍しく感じることに、清新な感じがして心惹かれることをいう。夏風から秋風への変化を感じ取ったことを表現した語。また、「うら」は接頭語の「うら」と「裏」の掛詞。夏の間着用する単衣と違い、秋に着る袷には裏地がある。風だけでなく衣服の変化をも意識させる表現。また、「裏」は「唐」衣の縁語。参考歌「吾が背子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風」(『古今和歌集』巻四 秋歌上 よみ人しらず)

【現代語訳】

(冬支度のために) 唐衣を打って夜を明かすようですね、秋の初風に吹かれて袷の裏地が珍しく感じられる宵から。

右

式部

30 聞く人も起き明かすかな 夜もすがら打つ 狭衣に目のみ醒めつつ

【語釈】

夜もすがら 「み吉野の山の秋風さ夜更けてふるさと寒く衣つつなり」（『新古今和歌集』 巻五 秋歌下
藤原雅経）など、「衣をつつ」ことは夜通し行つこととして歌に詠まれる。

狭衣に 「狭衣」の語は「人妻に言ふは誰がこと狭衣のこの細解けと言ふは誰がこと」（『万葉集』 巻十二）などに見られる。また、六条齋院禊子内親王家の宣旨の手によると言われる『狭衣物語』の物語名は、主人公・狭衣大将の詠歌「いろいろに重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣」（巻一）によるものである。

【現代語訳】

聞く人も夜通し起きているのですね、一晩中衣を打っている音に目がすっかり醒めてしまつて。

両者とも同じような情景を詠んでいるが、右の式部詠が平板な詠みぶりであるのに対し、左の美作の歌は掛詞・縁語を用いた巧みなものである。そのため、「左^勝」と判じられたのであろう。

本歌合では「鴨」「鹿」「駒迎へ」と、同じ和歌を本歌としたと思しき番いが複数見られる。あるいは、同一の材料（和歌）をどう詠み換えるかというような試みを意識的に行っていたのであろうか。